

(A評価、増加の背景および指導について)

- ・落ち着いて生活できる環境・・・要因として、考えられるのが、学級、学校でのルールの定着で、1・3・7・30の法則や廊下歩行（てくてくカレンダー）等の実践、また、聞く態度の熟成や自己評価チェック活動等により、生活が落ちついた。また、言葉遣いの指導を通して、相手を意識できるようになったことも考えられる。
- ・意欲の向上・・・物事への挑戦（大縄の練習・詩の暗唱・チャレンジ100等）で、やり遂げたことの賞賛や成就感が意欲向上に繋がった。
- ・自尊感情の向上・・・特に効果的であった活動としては、発声練習、自己チェック、あいさつカレンダー、各リーダー養成、掃除の手順指導、言葉遣いの指導、チャレンジ100等が有効であった。また、土台には、道徳の研究で、そのねらい、価値と現実生活に関係付けることで、子どもたち主体の学級経営が進められたと考えられる。

(C評価の背景および指導について)

- ・C評価を0に収束させることが課題である。児童は学業や家庭の状況等に課題があり、友だち関係や自信を喪失している傾向が見られた。そのため、言葉遣いに気をつけることで、友だち関係を修復、改善させたり、廊下をよく走る児童を教室移動のリーダーとし見本とさせたりしながら自信回復の指導を継続した。また、消極的な児童を色別のリーダーとして活躍させ、人前へでること自信をつけさせることや、保護者支援で向上を図った。今後も、C評価のもつ児童に対し、個々への児童理解を進め、良好な人間関係を構築のもと、個別指導や保護者支援を継続して指導していく必要がある。

(2) 自尊感情アンケート

全校で1学期と3学期とにアンケートを実施し比較検討したが、数値としては、全体的に変化が見られない結果になった。各自で自尊感情を自己評価させる中で、高位にきたのは、*友だちといると楽しいですかの項目で、みんなと居ることで安心と安定を図っている姿がみられた。しかし、*友だちに好かれているか、また、どう見られているか。*うそをついてしまう。*自分のことをダメだと思う。の三つ項目の評価が低位にきたことと関連して考察すると、友だちから、自分がどう見られ、どう評価されているかを日々気にしながら生活している様子が見られ、他人の行動に迎合しながらの生き方で自信を持ってない子どもの様子が伺えた。特に、低学年では、*みんなの前で失敗すること。の項目で顕著に評価が低く、自己否定（自分はダメだ）や恥意識が全体に強く、広く存在することが考えられ自分をそのまま出し切れていない姿がみられる。よく嘘をついてしまうところの項目では、友だちからの評価をよくするために、自分を守ろうとする自己防衛の姿が見られ、そこに恥意識が大きくも影響して嘘に繋がっていると考えられた。

結果を踏まえ、今後、子どもたちが自己評価（自分の行動、生き方を問う機会）をもち、教師がその自己評価を認め、修正、方向づけるなかで、自尊感情を高める指導や教育システムを作り、全体、個々へと対応していくことが急務になってくる。